That痕跡効果と副詞効果

高　安　和　子

富山大学人文学部紀要第55号抜刷
２０１１年８月

That 痕跡効果と副詞効果

高　安　和　子

初めに

英語には動詞の補部として働いている節がthatという補文標識によって導かれており，その補部節の中からその節の主語が移動した場合，その補部節を含む文が英語の文として使用できる文と使用できない文が存在する。生成文法の枠組みを使用して，この文法性の違いを説明する理論と引き起こす要因を検討することが本稿の目的である。

1　動詞の補部節

1. 1　補文標識thatによって導入されている補部節

英語には，動詞の補部(complement)として機能している埋め込み節（embedded clause）が，補文標識(complementizer)のthatによって導入されている文が存在する。このタイプの補部節は，主として人間の言葉と考えを伝えるものである。[1)]

(1) He <u>said</u> **that nine indictments have been returned publicly in such investigations.** (Biber, Conrad and Leech (2002:312))

(2) Did you <u>know</u> **that Kathy Jones had a brother here?** (ibidem)

(3) She <u>saw</u> **that it was a moose with a body as big as a truck.** (Biber, Conrad and Leech (2002:315))

(4) He looked at the wound and <u>found</u> **that it had stopped bleeding.** (ibidem)

(5) I didn't <u>agree</u> **that he should be compelled to do singing.** (Biber, Conrad and Leech (2002:314))

(6) I <u>promise</u> **that we will take great care of him.** (ibidem)

(7) I <u>suggested</u> **that she sit down on the chair and wait.** (ibidem)

(8) I <u>wrote</u> **that I would be satisfied with any old freighter.** (ibidem)

(9) He thinks [that she is here]. (Huddleston & Pullum (2002:950))

(10) He insists [that she be here]. (ibidem)

(11) He <u>felt</u> **that something was going to happen tonight.** (Biber, Conrad and Leech (2002:316))

(12) One of them mentioned to me [that your secretary might be leaving]. (Huddleston & Pullum (2002:953))

(13) I conclude from your silence that you have no objections. (Huddleston & Pullum (2002:959))

(14) They told us <u>that the battery was flat</u>. (Huddleston & Pullum (2002:958))

(15) I hope that this book you will read. (Doherty (1997:200))

(16) She prayed that next Wednesday the check would arrive. (Doherty(1997:202))

(17) The only problem may be **that the compound is difficult to remove after use.** (Biber, Conrad and Leech (2002:313))

(18) What the students believe is [$_{CP}$ that [$_{IP}$ they will pass the exam]]. (Bošković & Lasnik (2003:529))

(1)において，主節の動詞saidの補部として機能している埋め込み節であるthat nine indictments have been returned publicly in such investigations は，補文標識thatによって導入されている。また，(2)から(18)においても動詞の補部の位置を占める埋め込み節が，補文標識のthatによって導入されている。

(15)の文においては，動詞hopeの補部節であるthat節の動詞readの補部として機能している名詞句のthis bookが，補部節のthat節の文頭の位置を占めている。(16)の文においては，副詞句のnext Wednesdayが，動詞prayed の補部節であるthat節の文頭の位置を占めている。

1.2 補文標識thatを伴わない補部節

英語には，動詞の補部として機能している定形の埋め込み節が，補文標識のthatによって導入されていない文が存在する。Huddleston & Pullum (2005)は，インフォーマル・スタイルで，また，使用頻度の少ない長い動詞よりもよく使用される短い動詞の後で，thatが省略される傾向があると述べている。[2)]

(19) I know that it's genuine. (Huddleston & Pullum (2005:175))

(20) I know it's genuine. (ibidem)

(21) He says [that they are in Paris]. (Huddleston & Pullum (2002:951))

(22) He says [they are in Paris]. (ibidem)

(23) I thought that it was a good film. (Biber, Conrad and Leech (2002:308))

(24) I thought **it was a good film.** (ibidem)

(25) I guess **they didn't hear anything.** (Biber, Conrad and Leech (2002:315))

(20)が示すように，主節の動詞knowの補部として機能する定形の埋め込み節を導入する補文標識のthatは，省略することができる。同様に，(22)と (24)と (25)は，主節の動詞の補部節を導入する補文標識のthatを省略することができるということを示している。

2 動詞の補部節からのwh句の移動

2.1 動詞の補文標識thatを伴う補部節からの移動

英語には，主節の動詞の補部の位置を占める補文標識thatを伴う節の動詞の目的語が，上位の節へ移動していると分析される文法的な文が存在する。

(26) What did you confess that you had done? (Matthews (1981: 192))

(27) Who do you think [that [John saw *t*]] (Lasnik and Uriagereka (1988: 94))

(28) Whom$_i$ do you think [$_{CP}$ that [$_{IP}$ Lord Emsworth will invite t$_i$]]? (Haegeman (1991: 362))

(29) What$_i$ do you believe [that Mary painted t$_i$] (Manzini (1992: 56))

(26)において，動詞confessの補部節の補文標識thatを伴う節であるthat you had doneの動詞doneの目的語のwhatは，上位の節の文頭に存在する。(26)と同じように文法的な文である(27)と(28)と(29)について，要素が移動する場合，その構成素が移動する前に占めていた位置に，その構成素の痕跡t（trace）が残されるとする痕跡理論（trace theory）を採用して分析が行われるように，(26)のwh疑問文のwhatというwh句は，動詞confessの補部節の中にある動詞のdoneの目的語の位置から，上位の節へ移動したと分析できる。

他方，英語の動詞の補部として働く補文標識thatを伴う埋め込み節から，その埋め込み節の主語として働く要素を，埋め込み節より上位の節に移動することができないということを示す言語事実が存在する。

（30） * Who did you say that was waiting for me? (McCawley (1988: 474))

（31） * Who do you think [that [*t* saw Bill]] (Lasnik and Uriagereka (1988: 94))

（32） * Who$_i$ do you believe [that t$_i$ is a painter] (Manzini (1992: 13))

（33） * This is the man who I think that t will buy your house next year. (Haegeman (2003: 641))

(30)は動詞say の補部節の補文標識thatを伴う節であるthat was waiting for me の主語として機能しているwhoが，上位の節の文頭に存在する文であるが，この文は非文法的な文であると判断される。同様に非文法的な文であるとみなされ，痕跡理論を用いて分析がなされている(31)と(32)と(33)と同じように，(30)のwh疑問文において，whoというwh句が動詞sayの補部節の主語の位置から，上位の節へ移動することができない。

2.2　動詞の補文標識thatを伴わない補部節からの移動

英語には，動詞の補部の位置を占める補部節である埋め込み節が，補文標識のthatを伴わない文が認められる。このような動詞の補部の位置を占める補文標識thatを伴わない埋め込み節の中に存在する動詞の目的語が，その埋め込み節から上位の節に移動していると分析することができる文法的な文が存在する。

（34） What do you think Lee bought? (Browning (1996: 237))

（35） Who do you think [[John saw *t*]] (Lasnik and Uriagereka (1988: 94))

（36） Who$_i$ do you believe [Peter likes t$_i$] (Manzini (1992: 13))

（37） What$_i$ do you believe [Mary painted t$_i$] (Manzini (1992: 56))

(34)において，動詞thinkの補部節の動詞boughtの目的語のwhatが，上位の節に移動して文頭

の位置を占めている。痕跡理論を使用して文の構造が示されている(35) と(36)と (37)において，補部節の動詞の目的語はwh句の形を取り，その補部節の中にある痕跡tの位置から上位の節の文頭の位置に移動している。

更に，英語の動詞の補部として働く補文標識thatを伴わない補部節の主語が，その埋め込み節から上位の節に移動していると分析できる文法的な文が存在する。

(38) Who did you say was waiting for me? (McCawley (1988: 474))

(39) who do you think [saw Bill] (Chomsky and Lasnik (1977: 450))

(40) who did you believe [$_{CP}$ t′[$_{C'}$ e [$_{IP}$ t would win]]] (Chomsky (1986: 47))

(38)において，動詞sayの補部節の主語whoが，上位の節に移動して文頭の位置を占めている。痕跡理論を使用して文の構造が示されている(40)において，動詞believe の補部節の主語whoは，補部節の中にある主語の位置である痕跡tの位置から，上位の節の文頭の位置に移動している。

3　that痕跡効果

セクション2.1において，(41)が示すように，英語の動詞の補部として働く補文標識thatを伴う埋め込み節の述語の動詞の目的語は，その埋め込み節より上位の節に移動することができるが，これに対して，(42)の非文法性が示すように，その埋め込み節の主語は，上位の節に移動することができないということを述べた。また，セクション2.2において，(43)と (44)が示すように，英語の動詞の補部として働く補文標識thatを伴わない埋め込み節から，その埋め込み節の述語の動詞の目的語またはその埋め込み節の主語を，埋め込み節より上位の節に移動することができるということを述べた。

(41) (= (27)) Who do you think [that [John saw *t*]] (Lasnik and Uriagereka (1988: 94))

(42) (= (31)) * Who do you think [that [*t* saw Bill]] (ibidem)

(43) (= (35)) Who do you think [[John saw *t*]] (ibidem)

(44) (= (40)) who did you believe [$_{CP}$ t′[$_{C'}$ e [$_{IP}$ t would win]]] (Chomsky (1986: 47))

Chomsky and Lasnik (1977) は，(42)のような英語の動詞の補部として働く補文標識thatを伴う埋め込み節の主語を，上位の節に移動することができないという事実を，(45)のthat 痕跡フィルターを設定して，このフィルターが適用された結果であるとして説明した。

(45) * [that [$_{NP}$ e]], unless S or its trace is in the context: [$_{NP}$ NP . . .] [3)]

この(42)の非文法性が示す現象は，that 痕跡効果（*that*-trace effect）と呼ばれる。

英語に観察されるthat 痕跡効果について，Bošković（2011）は(46)の補文標識のthatを含む文と(47)の補文標識thatを含まない文の間に認められる違いに注目して説明している。

(46) * Who do you think that t left Mary? (Bošković (2011:31))

(47) Who do you think C t left Mary? (ibidem)

Bošković（2011）は，非文法的な文である(46)においては，補文標識のthatが主節の動詞thinkの補部として機能している埋め込み節を導入しているが，他方，文法的な文である(47)においては，空補文標識(null complementizer)のCが主節の動詞thinkの補部として機能している埋め込み節を導入していると分析する。この分析は，一般的に補文標識のthat が省略されているとされる位置に，空補文標識が存在するとするものである。Bošković は，(46) と(47)の違いは音韻上のものであり，その違いは，(46)の補文標識thatは顕在的(overt)であり，(47)の補文標識は空(null)であるということである。[4] そして，この音声形式PF（phonetic form）の違いを使用して，(46)と (47)の文法性の違いを説明する。更に，Bošković は，(46)の非文法性には移動の局所性(locality of movement)が関係していると考える。Bošković は，(46)が移動の局所性に違反しており，その問題を起こすものは補文標識のthatであるとみなしている。また，操作が移動の局所性に違反する場合には，その問題を起こす要素に*印が付けられるという立場を採用している。

Bošković (2011) は，非文法的な(46)の派生には，whoの移動とPFにおける削除が関与していると主張する。

(48) Who do you think [$_{CP}$ ~~who~~ that * ~~who~~ left Mary]? (Bošković (2011:31))

(48)において，動詞thinkの補部節である埋め込み節のCPの主語のwhoが，埋め込み節のCPの指定辞（specifier）の位置に移動した時に，補文標識のthatに*印が付与される。また，移動したwhoのコピーは，~~who~~で示されているように，削除される。補文標識のthatに付与された*印は，コピーの削除によって削除されるということが起こらないため，最終的なPF表示に存在することになる。(46)は，PFにおける*印の存在のため，PFで排除される。

(46)と対比的な(47)についても，Bošković は(46)の補文標識thatと同様に，空補文標識が要素の移動に関して問題を起こすものとして説明している。

(49) Who do you think [$_{CP}$ who C * [$_{IP}$ who left Mary]]? (Bošković (2011:32))

(49)において，動詞thinkの補部節である埋め込み節のCPの主語の位置を占めるwhoが，埋め込み節のCPの指定辞の位置に移動する時に空補文標識Cを横切ると，その空補文標識Cに*印が付与される。(49)は (47)の顕在的統語構造であると説明される。(50)が示すように，*印が付与された空補文標識Cは，PFにおいて接辞として上位の位置にある動詞thinkに付加されるが，*印はコピーされないと述べられている。

(50) Who do you C+think [$_{CP}$ who C * [$_{IP}$ who left Mary]]? (Bošković (2011:33))

(47)で示されているように，(50)の構造にコピー削除の規則が適用され，移動の頭部ではないコピーは全て削除される。

(51) Who do you C+think [$_{CP}$ ~~who C*~~ [$_{IP}$ ~~who~~ left Mary]]? (Bošković (2011:33))

(51)の最終的な表示には*印が付与された要素が残存していないため，(51)は，(48)と異なり移動の局所性に違反しないと述べられている。Bošković は，(47)の文法性はPFにおける削除に起因すると主張しているのである。

4　副詞効果

セクション３において，動詞の補部として働く補文標識thatを伴う埋め込み節の主語を，その埋め込み節より上位の節に移動することができないという英語に認められるthat痕跡効果と，that痕跡効果が認められる文とその文と対比的な文の派生について述べたBošković（2011）の説明を示した。このthat痕跡効果については，動詞の補部として機能し，関係詞節ではない補文標識thatを伴う埋め込み節の主語が，その埋め込み節より上位の節に移動しているが，英語の文として使用することができる文が存在するという観察がある。このthat痕跡効果が抑制されていると思われるタイプの文に見られる共通点は，動詞の補部節を導入している補文標識thatに副詞（類）が後続するということである。

(52) Who did she say that tomorrow ____ would regret his words? (Bresnan (1977: 194))

(53) I asked what$_i$ Leslie said that in her opinion t$_i$ had made Robin give a book to Lee. (Culicover (1993: 558))

(54) Leslie is the person who I said that at no time would run for any public office. (Rizzi (1997: 315))

(55) Leslie is the person who I said that only in that election ran for public office. (Rizzi (1997: 316))

(56) Who did you say that without a doubt would hate the soup? (Sobin (2002: 528))

(57) This is the linguist who I think that next year t will get appointed in Geneva. (Haegeman (2003: 644))

(52)から(57)の文には，that痕跡効果が認められない。(52)において，補文標識thatを伴う埋め込み節の主語のwho が，副詞のtomorrowの後の下線が引かれている位置からその埋め込み節より上位の節に移動している。(52)について，Bresnan (1977)は補文標識のthatと下線が引かれた位置の間に副詞が存在すると述べている。この補文標識thatと痕跡の間に副詞類が存在することにより文の文法性の度合いが改善される現象は，副詞効果(the adverb effect)と呼ばれる。

Bošković（2011）は，この副詞効果というthat痕跡効果を緩和する現象を，that痕跡効果を説明するために設定したものと同じPFにおける削除によって説明できると主張している。

(58) *Robin met the man who Leslie said that t was the mayor of the city. (Bošković (2011:33))

(59) Robin met the man who Leslie said that for all intents and purposes t was the mayor of the city. (ibidem)

Bošković は，that痕跡効果を緩和する副詞効果が観察される(59)を説明するために，補文標識句CPが繰り返すという分析を採用している。補文標識句CPが繰り返すという分析では，補文

標識のthatは下位のCPの中に生成され，上位のCPへ移動されるとみなされる。

(60) Robin met the man who Leslie said [$_{CP}$ that$_i$ [$_{CP}$ for all intents and purposes ~~who$_j$~~ ~~that$_i$~~* [$_{IP}$ ~~who$_j$~~ was the mayor of the city]]]. (Bošković (2011:35))

(60)において，wh句が下位のCPの中にある補文標識のthatを横切って移動するため，この補文標識thatに*印が付与される。wh句の移動の後に，この*印が付与された補文標識thatが上位のCPへ移動するが，補文標識thatに付与された*印はコピーされないと分析されている。補文標識thatが上位のCPへ移動した後にコピーの削除が適用され，下位にあるwh句と補文標識thatのコピーが削除される。この削除の結果，補文標識thatと痕跡の間に副詞類が存在する文の最終表示に*印が残存しないことになり，(59)の文の文法性が説明できると述べられている。

5　副詞効果と付加部の前置

セクション４では，Bošković (2011)の副詞効果に対する説明を示したが，この副詞類の働きの分析について，Haegeman (2003)が補文標識that と痕跡tの間の位置を占める副詞類の前置の可能性について示した言語事実を考察したい。

(61) This is the linguist who I think that next year t will get appointed in Geneva. (Haegeman (2003: 644))

(62) * This is the linguist who I think that next year t expects that all his students will have a job. (ibidem)

Haegeman (2003)は，(61)と(62)の時を表す付加部next year を前置された付加部(fronted adjunct)とみなしているということに注意すべきである。(61)では，この付加部がこの付加部が存在する節の時を表す修飾要素として解釈されるということから，節の左の周辺部へ短い距離を移動したとみなしている。他方の(62)では，時を表す付加部のnext yearは，付加部のnext yearが存在する節より下位の節の時を表す修飾要素として解釈されるということから，next yearは長距離を移動した（前置された）ものであるとHaegeman (2003)は主張している。文法的な(61)の付加部のnext yearの移動は，同一のCP内での移動であるが，他方，非文法的な(62)の付加部のnext yearの移動は，下位のCPから上位のCPへの長距離移動であるということになる。この立場に対して，(61) と(62)の副詞類であるnext yearという付加部が，移動ではなく基底部においてその占める位置に生成されたものであるという可能性もある。Bošković（2011）では分析されていない(61) と(62)の文法性の違いを引き起こすものは何であるかを更に検討する必要がある。また，この問題には，話題(topic)の分析も含める必要があると思われる。

注

1. Biber, Conrad and Leech (2002:312)
2. Huddleston & Pullum (2005:176)
3. Chomsky and Lasnik (1977: 456)
4. Bošković（2011:31）

References

Biber, D., S. Conrad, and G. Leech (2002) *Longman Student Grammar of Spoken and Written English*, Pearson Education, Edinburgh.

Bresnan, J. (1977) "Variables in the Theory of Transformations," in P.W.Culicover, T.Wasow, and A.Akmajian, eds., *Formal Syntax*, Academic Press, New York.

Bošković, Z. (2011) "Rescue by PF Deletion, Traces as (Non)interveners, and the *That*-Trace Effect," *Linguistic Inquiry*, 42, 1-44.

Bošković, Z. and H. Lasnik (2003) "On the Distribution of Null Complementizers," *The Linguistic Review*, 34, 527-546.

Bresnan, J. (1977) "Variables in the Theory of Transformations," in P.W.Culicover, T.Wasow, and A.Akmajian, eds., *Formal Syntax*, Academic Press, New York.

Browning, M. A. (1996) "CP Recursion and that-t Effects," *Linguistic Inquiry*, 27, 237-255.

Chomsky, N. (1986) *Barriers*, The MIT Press, Cambridge.

Chomsky,N. and H. Lasnik (1977) "Filters and Control," *Linguistic Inquiry*, 8, 425-504.

Culicover, P. W. (1993) "Evidence against ECP Accounts of the *That-t* Effect," *Linguistic Inquiry* , 24, 557-561.

Doherty, C. (1997) "Clauses without complementizers:Finite IP-complementation in English," *The Linguistic Review*, 14, 197-228.

Haegeman, L. (1991) *Introduction to Government & Binding Theory*, Basil Blackwell, Oxford.

Haegeman, L. (2003) "Notes on Long Adverbial Fronting in English and the Left Periphery," *Linguistic Inquiry,* 34, 640-649.

Huddleston, R. (1984) *Introduction to the Grammar of English*, Cambridge University Press, Cambridge.

Huddleston, R. and G. K. Pullum (2002) *The Cambridge Gramnar of the English Language,* Cambridge University Press, Cambridge.

Huddleston, R. and G. K. Pullum (2005) *A Student's Introduction to English Grammar,* Cambridge University Press, Cambridge.

Lasnik, H. and J. Uriagereka (1988) *A Course in GB Syntax*, The MIT Press, Cambridge.

Manzini, M. R. (1992) *Locality*, The MIT Press, Cambridge.

Matthews, P. H. (1981) *Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.

McCawley, J. D. (1988) *The Syntactic Phenomena of English*, The University of Chicago Press, Chicago.

Rizzi, L. (1990) *Relativized Minimality*, The MIT Press, Cambridge.

Rizzi, L. (1997) " The Fine Structure of the Left Periphery," in L. Haegeman ed., *Elements of Grammar*, Kluwer, Dordrecht.

Sobin, N. (2002) " The Comp-trace effect, the adverb effect and minimal CP," *Journal of Linguistics* , 38, 527-560.